



今、明かされる 南京事件

評論家・近現代史研究家 阿羅 健一

昭和12年12月17日に行われた南京入城式。先頭が中支那方面軍司令官の松井大将

南京事件とは何か

戦後、「南京大虐殺」という話が浮上した。昭和12（1937）年、日中戦争の最中に、日本軍が南京を攻略した後、数十万人もの捕虜と無辜の民を殺害したというものである。最近になって中国がこれを世界に訴えた結果、平成27（2015）年には「南京大虐殺」がユネスコの世界記憶遺産に認められた。しかし、中国側が指摘するような「南京大虐殺」の事実とは、どこを探してもない。多数の矛盾点とともに、南京事件の真実について解説する。

南京事件とは何かと問われたら、戦後の昭和21（1946）年に行われた東京裁判（極東軍事裁判）の判決文を見るのが良いと答える。なぜなら、日本の弁護士も加わった2年半にわたる審理の末、事件はあったとされたからである。そしてそのことにより、南京事件は世界中に知られるようになった。

それでは東京裁判の法廷がどうみなしたかといえば、昭和12（1937）年に日本軍が南京に入ったときのことを、「日本兵は市内に群がってさまざ

まな残虐行為を犯した。目撃者の一人によると、日本兵は同市を荒らし汚すために、まるで野蠻人の一団のように放たれたのであった」と判定し、その結果、

「日本軍が占領してから最初の6週間に、南京とその周辺で殺害された一般人と捕虜の総数は、20万人以上」

の事件が起こったとみなした。

また責任者として中支那方面軍司令官の松井石根大将を挙げ、判決文の判定では、

「6、7週間の期間において、何千という婦人が強姦され、10万人以上の人々が殺害され」



とし、

「松井は自分の軍隊を統制し、南京の不幸な市民を保護する義務を持つていたとともに、その権限をも持つていた。この義務の履行を怠ったことについて、彼は犯罪的責任があると認めなければならぬ」

として絞首刑に処した。

東京裁判の被告全員が複数の訴因で有罪と判定されたが、松井石根大将は南京事件だけ有罪とされ、しかもそれだけで絞首刑となった。

犠牲者数を20万と言ったり、あるいは10万と言ったり、心もとない判決文だが、どちらにしても凄まじい戦争犯罪と断定された。

「南京大虐殺」説はいかにして出ま上がったか

検察の立証に対し弁護側は、事件は中国の「宣伝」であると反論した。中国では宣伝が頻繁に行われ、今回もまさにそれに当てはまっていたからである。

このとき弁護側は具体的な宣伝を挙げたわけではなかったが、南京事件の研究が進み、宣伝に携わった人の回想記が出されると、どのような宣伝が行われたか判明していき、今では中国の宣伝であることが明確になっている。

当時の中国は中華民国
といい、中華民国を動かしていたのは国民党で、昭和12年に支那事変が始まると、国民党宣伝部次長に董顕光が就き、国際宣伝処長に曾虚白が就いた。董顕光はアメリカに留学し、アメリカと中国で新聞記者を務め、曾虚白は

大学教授、出版業を経て、新聞の検閲に携わり、ともに宣伝をよく知っていた。董顕光は中華民国が台湾に移ってから駐日大使や駐米大使を務め、曾虚白は中華民国最大の通信社である中央通信社の社長となった人物である。

曾虚白が国際宣伝処長に就いた頃、上海にいたイギリスの新聞記者ティンパーリが中国側に協力しているのを知って、曾虚白は相談した。

その頃日本の新聞に、南京へ向かう日本軍で「百人斬り競争」が行われている記事が載った。百人斬り競争は敵兵を斬る戦闘行為であったが、曾虚白は市民を斬る殺人競争に変えて宣伝することにした。

ティンパーリのほうは、南京にいたベイツ教授を始めとする10人ほどのアメリカの宣教師に協力を求め、南京の日本軍の残虐さを書いてもらうことにした。

歪曲された百人斬り競争と、宣教師たちの書いたものはティンパーリによって1冊の本にまとめられ、国民党が資金を出して世界中で刊行

された。さらに南京にいた宣教師のフィッチはマギー牧師の撮影したフィルムをアメリカに持っていき、残虐行為は何も映っていないことが、政治家や記者たちに見せて回った。

国民党宣伝部は国民を奮い立たせるため、あるいはアメリカなど第三国を味方につけるため、日本軍の残虐性を捏造して宣伝した。

それにしても、そんなにうまく事が運ぶものかと考える人がいるかもしれない。

しかし、ティンパーリは記者時代に董顕光副部長の部下、ベイツは中華民国政府の顧問、フィッチは中華民国の指導者である蒋介石が宋美齡と結婚して初めて訪れた外国人の家、という関係にあり、彼らは虚偽の宣伝を全く厭わなかった。

また聖職者ともあろう者が、虚偽の宣伝に協力するののかという疑問も湧き上がるが、彼らは、布教地の中国に強い愛着を持っており、中国を悲劇のヒーローにしてアメリカから布教のための支援を続けさせようとした動機を持っていた。

宣教師が中国側に立つことはこれが初めてではなく、宣教師の子として中国に生まれ、アメリカで『タイム』や『ライフ』などの雑誌を創刊して成功を取めたヘンリー・ルースが中華民国や蒋介石に肩入れしたことは、あまりにも有名である。

宣伝が大々的に行われた背景には、中国が宣伝を重視していたことのほか、第一次世界大戦で宣伝が成功したことが挙げられる。このときイギリスは宣伝大臣を設けたほど力を入れ、宣伝合戦では敵の残虐さが特に効果を収めた。それが南京事件という残虐ストーリーにつながり、第三国人が言い立てたことにより、南京事件は真実味を増し、宣伝として大成功を収めることになった。

昭和20（1945）年に日本が大東亜戦争に負けると、東京裁判が開かれ、ベイツ教授やマギー牧師は東京に来て、ありもしないことを証言した。証言に立ったマギー牧師は、あそこで殺人があった、ここでは強姦があった、日本兵はいたるところで略奪した、と丸々1日にわたって

日本軍の暴虐を証言して日本人を驚愕させた。ところが証言の最後に弁護士が、「あなたご自身がご覧になった現行犯はいくつか」と尋ねると、殺人1件、強姦1件、略奪は冷蔵庫を奪ったものだけと答えた。証言のほとんどが架空の出来事だったのである。

戦争が終わったばかりで、憎悪、敵愾心てきがいしんというものがまだまだ残っていたため、このような証言が平然と行われ、しかもそういう証言がそっくり判決に取り入れられ、南京事件が世界中に広まったのである。

南京事件を巡る矛盾点

作り事であるから、南京事件と言われるものの矛盾点は限りなくある。いくつか挙げる。

1つは、10万から20万人の虐殺が行われていたとするなら、人口統計に現れているはずであるが、全く現れていない。

戦前の南京の人口は100万人

だった。上海事変が始まって日本機が南京を爆撃すると、富裕階級の中から、さっそく南京を去る人が現れた。日本軍が昭和12年10月下旬に上海を制圧すると、多くの市民は次の戦場になると考えて南京を後にした。政府と市の関係者も次々と南京を去り、警察庁長官だけが残る。11月28日、警察庁長官は南京市民を20万と発表した。

12月13日に日本軍が南京を占領したとき、市民の集まっている難民区に中国軍が潜入したため、日本軍は12月24日から1月5日にかけて、市民か軍人かどうかの区別をした。10歳以下の子供と老女を除き、市民証を与えた数は16万に達した。除いた人たちを加えると21万3000人と推計され、日本軍が南京に入る前と変わりなかった。

2つ目は、マギー牧師たちが証言したような市民虐殺があったとするなら、難民区に多くの死体があったはずであるが、ほとんどない。

東京裁判に埋葬記録が提出された。それによると難民区にあった死体は

175体で、これらは中国軍が処刑したならず者や難民区の境界線に落ちた砲弾に当たって死んだ市民で、市民虐殺がなかったことを示している。

3つ目は、2万という強姦があったと認定されたが、これも全く痕跡がない。

日本軍が南京に入ったとき、病院が1つだけ残っていて診療していた。キリスト教系の病院で、その医師は墮胎を禁じたと東京裁判で証言している。強姦が発生し墮胎が行われなかったなら、昭和13年10月頃、新生児が増えているはずであるが、統計を見ると全く増えていない。

責任を問われた松井石根大将が、南京事件を初めて耳にしたのは、敗戦の昭和20年12月のラジオ放送であり、事件があったとされた8年後に知った。また、東京裁判の判決文は「占領の前に、松井は自分の軍隊に對して、行動を厳正にせよという命令を確かに出し、その後さらに同じ趣旨の命令を出した」と言い、松井が不法行為を命じたわけでないこと判定了。10万から20万人の大殺害が



行われたというのに、最高司令官が
8年間も知らなかったり、命令がな
かったことがあるだろうか。

こういつた矛盾は限りがない。

「罪」と実際 松井石根大将の

松井大将は東京裁判の検察官から
「証人の言を借りますと、南京におけ
る暴行事件は、南京陥落後6週間に
わたって行われたということと言っ
ておりますが」と尋問されたが、「私
は信じません」と明確に答え、南京
事件を否定した。

松井石根は、士官学校在学中か
らアジアに関心を持ち、将校になる

と中国関係の道を歩み、やがて孫文
の「日本なくして中国なし、中国な
くして日本なし」という考えに共鳴、
陸軍屈指の中国専門家となった。そ
の頃の中国は軍閥が争っており、松
井は中国が早く統一されることを望
み、分裂によって苦しんでいる中国
国民に同情を抱いた。中將に進んで
いたとき、孫文の提唱した「大アジ
ア主義」から取って「大アジア主義
協会」を設立し、さらに日中の提携

をめざした。

中支那方面軍司令官に任命されて
南京攻略を迎えると、「南京攻略は
世界的事件であるゆえに慎重に研究
して日本の名誉を一層發揮し中国民
衆の信頼を増すようにせよ」と参謀
長に命じており、松井大将は、市民
の安寧をいつも案じていた。

南京に向かう途中、日本兵の死体
が茶毘に付されても、中国兵はその
ままにされているのを知ると、参謀
を呼んで中国兵の死体もねんごろに
葬るよう命じた。

南京が陥落して入城式が行われ、
翌日、慰霊祭が行われた。松井大将
は日本軍の戦死者だけでなく中国軍
の戦死者も一緒に慰霊するよう命じ
たが、準備の都合から合同の慰霊祭
は行われなかった。

翌年2月に凱旋帰国すると松井大
將は、日中双方の兵士の慰霊を祈願
する生活を送るようになり、間もな
く熱海の伊豆山に引越すが、同じ
慰霊の生活を続けた。

昭和15（1940）年、松井大
將は戦場となった上海と南京の土を

加えて観音像を建立し、亡くなった
日中の兵士によってアジアは繁栄す
るといふ思いから、興亜観音と名付
け、鳴沢山の中腹に本堂を建て、毎
朝、そこで登って祈願することを
日課とした（上の写真）。

松井大将が建立した興亜観音は、
今も鳴沢山に建っており、そばにあ
る建立縁起には「怨親平等」と刻ま
れている。「怨親平等」とは、敵も
味方もが極楽往生できるといふ仏教
の言葉で、松井大将は日本兵も中国
兵も、同じように成仏できることを
願って刻んだ。

松井大将は観音様の熱心な信者
で、観音様に救われて往生すること
を願っていた。そのため、東京裁判
の被告に指名されても恐れることは
何もなかったが、若いときから慈し
んだ中国人を虐殺したとして処刑さ
れることだけは承服できなかつた。

判明した 証拠写真の捏造

南京で撮影された映像はいくつか



毎年5月18日の興亜観音例大祭には多くの人が慰霊のため集まる。
法要が始まる前に本堂の前に集まった人たち



農作業から帰る中国農民と彼らを守る日本兵。しかし婦女子を連行して強姦したと説明され、南京事件の写真として使われた

あるが、それらは撮影者、撮影日時、撮影場所がはっきりしている。

南京事件はでっちあげられたものだから、虐殺の写真というのは、南京と関係ない写真を南京虐殺の写真としたり、虐殺と関係のない写真に虐殺という説明が付しているか、どちらかである。

代表的な例を1つ挙げる。

昭和12年11月10日号の『アサヒグラフ』（朝日新聞社）に「我が兵士に護られて野良仕事より部落へかへ

る日の丸部落の女子供の群れ」と説明のついた写真が掲載された。その頃、日本軍は上海を制圧しつつあったが、郊外は中国の支配下にあった。

中国の農民は郊外で農作業につかなければならぬが、郊外への行き来は危険で、そのため日本兵が護衛についたという写真がこれである（上の写真）。

南京攻略戦が始まる前に撮影されたこの写真が、南京虐殺の写真として使われた。

昭和47（1972）年に刊行された朝日新聞の本多勝一記者による『中国の日本軍』の中に使われ、

「婦女子を狩り集めて連れて行く日本兵たち。強姦や輪姦は7、8歳の幼女から、70歳を越えた老女まで及んだ」と説明された。本多勝一は平成7

年の『本多勝一集 中国の旅』の中でもこの写真を使用している。

平成9（1997）年に刊行された笠原十九司の『南京事件』でも使われ、こう説明された。

「日本兵に拉致される江南地方の

中国人女性たち」

このほか、中華人民共和国はこの写真を南京虐殺記念館に展示した。

世界的なベストセラーとなったアイリス・チャンの著作『ザ・レイプ・オブ・南京』でも「数千人の女性が狩り集められ、強姦されるか、慰安所に強制された」と説明が付されて使用された。

間違いは早くから指摘されていたが、笠原は平成10（1998）年に誤用を認めた。自民党議員団が抗議して、中国の南京虐殺記念館は平成

20（2008）年12月に、こっそりこの写真を撤去した。本多が誤用を認めたのは平成26（2014）年になってからで、『週刊新潮』の指摘にしぶしぶ認めた。

この間、全く関係ない写真が南京の日本軍の残虐さを表す写真として使われ続けたのである。

仕掛けられた情報戦

東京裁判の判決が下りる頃、中国では国民党と共産党の戦いが頂点

に達し、やがて国民党は台湾に逃

れ、共産党は昭和24（1949）年10月に中華人民共和国の建国を宣言する。中華人民共和国はその勢いで、蒋介石を第一の戦犯とし、中華民国を潰そうとするが、台湾海峡があつて攻めきれない。中華民国は戦勝国として国連の常任理事国の地位にあり、中華人民共和国にとって中華民国は目の上の瘤として残った。

昭和47（1972）年にアメリカが中華人民共和国を認めようとしたとき、中華人民共和国は中華民国との関係を切るようアメリカに求めた。中華人民共和国にとって中華民国は核心的利益であり、その存在を絶対に認めない。日本に対しても同様な態度を取り、日中国交回復のとき、日本は中華民国と手を切らざるを得なかった。

このようであったから、中華人民共和国は、中華民国が宣伝として成功した南京事件のことを口が裂けても言えなかった。共産党主席の毛沢東が生涯、南京事件を口にしなければそのため、中華人民共和国

の教科書に南京事件が載ることはなく、生徒たちは南京事件を知らなかった。

昭和50(1975)年、蒋介石が亡くなった。翌年、毛沢東が亡くなる。常任理事国はすでに中華人民共和国に移り、中華人民共和国にとって中華民国はかつてほどの存在ではなくなっていた。それとともに中華人民共和国にとって日本の存在が重要になっていった。

昭和55(1980)年、中華人民共和国は初めて南京事件を教科書に記載した。昭和57年には政府高官が初めて南京事件を口にする。そして昭和60(1985)年には南京虐殺記念館を建立した。中華民国の宣伝であったことを気にするより、南京事件を対日カードとして利用するほうが良いと考え始めたのである。建立された南京虐殺記念館は小さい建物で、屋内は暗く、展示も間違いだらけだった。やがて改築され、ジオラマなどを使う展示に変えられた。平成17(2005)年には大改築に進み、平成21(2009)年に

は、それまでと比べ敷地が3倍、展示場が12倍となり、費用は50億とも80億とも言われた虐殺記念館が出来上がった。これほど時間と金をかけたのは、対日カードとしての価値を高めるためである。

アメリカでも南京事件の声が上がり始めた。平成6(1994)年、中国系アメリカ人が「世界抗日戦争史実維護連合会」を発足させた。その参加団体のひとつである「第二次大戦アジア史実保存連盟(ALPHA)」は、平成9(1997)年、中国系アメリカ人アイリス・チャンの『ザ・レイブ・オブ・南京』の出版とベストセラー化を仕掛けた。支部が隣国カナダに結成され、中国系カナダ人が働きかけて平成24(2012)年にトロント市議会は

南京大虐殺75周年宣言を可決した。こういった動きが功を奏したのだろう、今アメリカの高校生は教科書で南京事件を学んでいる。中国自身も平成26(2014)年に、これまでなかったような力を入れ、3月に習近平がドイツを訪れて

南京事件を取り上げ、4月にはデンマーク女王を虐殺記念館に案内、6月にはユネスコの記憶遺産に申請12月には13日を「南京大虐殺犠牲者国家追悼日」として国家主催式典とした。式典に習近平自ら出席したが、中華人民共和国が教科書に掲載したのは習近平が27歳のときであり、習近平は小学校でも大学でも、全く南京事件を習っていない。

平成27年10月、ユネスコは南京事件を世界記憶遺産として認めた。ユネスコが認めたことから、南京事件はあつたと考える人が現れたかもしれない。しかし申請のためユネスコに提出されたのは目録だけで、それだけでユネスコは世界記憶遺産として認めた。その目録も、一部は以前から知られている史料で、単に南京を記録したものである。ユネスコの世界記憶遺産にどれほどの価値があるか、明白である。

日本政府は南京事件を認めていなかったが、中国の高官が言い出した昭和57(1982)年、簡単に南京事件を認めた。やがて外務省はホー

ムページに「日本政府としては、日本軍の南京入城(1937年)後、非戦闘員の殺害や略奪等があったことは否定できないと考えています」と書き込むようになった。言うまでもなくホームページの記述に根拠はない。

南京事件は戦時宣伝であり、事実ではない。今求められるのは日本の歴史を直視する姿勢である。

阿羅 健一 (あらけんいち)

昭和19年宮城県生まれ。東北大学文学部卒業。会社員を経て、59年からフリーで近現代史研究に従事。現代アジア史を中心に研究。「百人斬り訴訟を支援する会」会長を経て、現在「南京戦の真実を追求する会」会長を務める。有限会社情報出版代表取締役。主な著書に『日中戦争は中国の侵略で始まった』(悟空出版)『謎解き「南京事件」東京裁判の証言を検証する』(PHP研究所)『秘録・日本国防軍クーデター計画』(講談社)『「南京事件」日本人48人の証言』(日中戦争はドイツが仕組んだ—上海戦とドイツ軍事顧問団のナゾ) (以上、小学館)『南京で本当は何が起こったのか』(徳間書店)など多数

